しのびね

嵯峨野わたり

神無月ばかりのことなるに、少将殿は嵯峨野わたりの紅葉御覧ありて、小倉の裾など心静かにながめ歩き給ふほどに、いと由ある小柴垣のうちに、耳馴れぬほどの琴の音響き合ひて聞こゆ。「思ひよらぬ琴の音かな。いかなる人の弾くらん。」と、随身に案内させ給ふに、「御簾かけわたして、格子二間ばかり上げたるうちに侍る。」と申せば、何となくおはして、小柴垣の蔭にうち隠れて聞きおはす。

日も暮れゆけば、琴も弾きさしつ。月やうやうさし出でてをかしきほどに、何人ならん、ゆかしと思して、人の見ぬ方の簀の子に尻かけてながめ居給ふに、おとなしやかなる声にて、「いと艶なるにほひかな。いづくより吹きくる風にや。」と言へば、少し若き声にて、「姫君の方に、御火取り召しつる、さにこそあらめ。」と言ふに、さればこそ、姫君など言ふと思して、見つけられなば、たよりにして言ひもよらまほし。見あらはさぬほどは、人の容貌も知りがたきことぞかし。されども琴の音にかよひたるありさまならば、などておろかならん。いかにして見るわざしてんと思して、やをらのぼりて、立蔀のもとにたたずみ給へど、格子参らする人、見もつけで入りぬ。

大殿油参る気色にて、いづくも仮の住み処と見えて、したたかならずあさはかなる住まひなれば、ここかしこ垣間見歩き給ふ。隅の間の方に、細き隙見つけてのぞき給へば、人々集まりて、絵にやあらん、巻物見居たり。

少し奥の方に添ひ臥したる人や、もし姫君といふ人ならんと、目をつけて見給へば、菊の移ろひたる五つばかり、白き袴ぞ見ゆる。髪のこぼれかかりたるは、まづうつくしやと、ふと見えたるに、顔はそばみたれば見えず。四十あまりなる尼君、白き衣のなえばめる着て、寄り臥して、絵物語見居たり。「目のかすみて、小さき文字は見えぬこそいとあはれ。積もる年のしるしにこそ。火明かくかかげんや。」と言ふに、小さき童寄りて、ことごとしくかかげたれば、きらきらと見ゆる。

奥なる人、腕を枕にして居給へれば、「大殿籠るにや、さらば読みさしてん。」と言ふに、少し起き上がりて、「さもあらず、よく聞き侍るを。」とて、少しほほゑみたる顔の、言はんかたなくうつくしければ、胸うちさわぎて、あさましきまでまもらるるに、いかなる人の、かかる山里には忍びて居たらんとあはれにて、出づべき心地もせず。

絵見果てて人々さしのき、「なほめづらしきにほひのするかな。ここもとに薫き給ふ香の香

には似ざんめり。」と言へば、御格子参らせつる童、「さきに外へ出でて侍れば、さと薫くゆりかかる心地し侍る。」と言ふに、恐ろしくて立ちのき給ふ。

【口語訳】

十月頃のことであるが、少将殿が嵯峨野近辺の紅葉を御覧になり、小倉山の麓などをしみじみとあちこち見て回っていらっしゃる時に、たいそう風情ある小柴垣の中から、聞き慣れない感じの琴の琴の音が響き合って聞こえてくる。（少将は）「思いがけない琴の音色だなあ。どんな人が弾いているのだろう。」と、随身を使って様子を見に行かせなさったところ、（随身が）「一面に御簾を掛けわたして、格子を二間ほど上げてある中におりますよ。」と申すので、（少将は）何となく（その近くへ）おいでになって、小柴垣の陰に隠れながら（琴の音を）聞いていらっしゃる。

日も暮れてきたので、琴を弾くのをやめてしまった。月が少しずつ上ってきて趣のある時分に、（少将は）どんな人なのだろう、見てみたいものだとお思いになって、人目に付かない方角の簀子に腰を掛けてぼんやり物思いにふけっていらっしゃったところ、年配の落ち着いた声で、（侍女が）「ずいぶんと優美な香りですね。どちらから吹いてくる風でしょうか。」と言うと、少し若い声で、（別の侍女が）「姫君のところで、御火取りをお取り寄せになりました、その香りでしょう。」と言うので、（少将は）思った通りだ、姫君などと言っているぞとお思いになって、（あちらから）見つけられてしまったら、（それを）きっかけにして言い寄りたいものだ。この目で見きわめないうちは、姫君の顔立ちもわかりにくいものであるよ。しかしながらあの琴の音色に通じている姿かたちであれば、どうして並々くらいのことがあろうか（いや、人並み以上であるに違いない）。何とかして見てみたいものだとお思いになって、そっと（簀子の）上に上がり、立蔀の近くにたたずみなさるけれども、格子を下ろして差し上げる（ために来た）侍女は、（少将を）見つけることなく中へ入ってしまった。

大殿油を灯して差し上げる様子で（明かりが灯ると）、どこも仮の住まいに見えて、簡素で奥行きのない住居のため、（少将は）あちらこちらと垣間見して回っていらっしゃる。隅の間の方に、細い隙間を見つけて（そこから）おのぞきになると、人々が集まって、絵なのであろうか、巻物をじっと見続けていた。

少し奥の方に寄り添って横になっている人が、もしかして姫君という人であろうかと、（少将は）注目して御覧になると、菊の花が色あせた色彩の襲五枚ほどと、白い袴とが見える。（姫君の）髪が乱れて垂れかかっている様子は、なんとも美しいことだと、すぐに目についたのだが、顔は横を向いているので見えない。四十歳過ぎの尼君が、白色の衣で着慣らした衣を着て、（脇息に）寄りかかって横になって、絵巻物を見ていた。「目がかすんで、小さい文字が見えないのはじつに悲しいことよ。年齢を重ねた証拠というものですね。灯りを明るくしてくれませんか。」と言うと、小さい童女が近づいて、大げさに灯心をかき立てたので、あたりが明るく輝いて見える。

奥にいる方は、腕を枕にして横になっていらっしゃったので、（侍女は）「おやすみでしょうか、それならここで読むのをやめましょう。」と言うと、（姫君は）少し起き上がって、「そうではありません、よく聞いておりますのに。」と言って、ちょっとほほえんでいる顔が、何とも言いようがないほど愛らしく美しかったので、（少将は）胸が高鳴って、我ながらあきれるほどつい見つめ続けてしまうので、いったいどんな方が、こんな山里に人目を忍んで暮らしているのだろうかとしみじみとした感動を覚え、その場を離れる気持ちになれない。

絵を見終えて周りの人々が退いて離れ、「やはり素敵な香りがすることよ。このあたりで薫いていらっしゃるお香の香りとは違っているようです。」と言うと、格子をお下げした童は、「先ほど外へ出ておりましたところ、香りがさっとふりかかる感じがしましたよ。」と言うので、（少将は）見つかるのを恐れてその場をお離れになる。